086028-000-7

特64-299

山河

金子　薫園／著

M44

DBD-0669

特64
299

河山歌

金子薫園

東京
新潮社藏版

45. 1. 12
閲了

西河

金子薰園

晩夏の京都に入れば蒸すごときあつさの中
の青き山河

目ざむれば絽蚊帳の外の青山の山ぎはあか
み京の日は出づ

三階の籐椅子により霧白き四方の山べのあ
かつきを見る

寺々の鐘さやかにもまくらべにいたる初秋
の京の朝かな

ならはしのごとく目ざめぬ花賣の白川いで
て來る朝明け

花賣のすゞしきこゑのゑみ來り寢たらぬ腦
のゑきりに痛し

秋かせにふるき京都の町をゆく旅人の眼の
鈍き昼かな

日傘さしてわかき娘も並び見る布さらす日
のあつき加茂川

加茂川の柳くろみて秋すでに川原の草に見
ゆる風かな

牛のゆく白川道の水車かたりことりと暇あ
るかな

天龍寺の屋根の瓦に秋かせのわたるを見つ
つ半日を消す

如意嶽に大の字點火り初秋の玄づかなる夜
の京はどよめく

あつくるしき紅がら色の家並の角をまがれば柳の見ゆる

京なまりかろくすべりて水茶屋の提灯の火の紅き夕ぐれ

夕ぐれに祇園をよぎり見たる子のくつきりと秋の灯に浮ぶかな

下加茂の森をあゆみて木洩れ日の黄なるを見れば秋とおどろく

黒谷のかなしき君の墓を吹く一生の後の秋かぜのこゑ

萩いまだ咲かず寺内は秋の水打ちたる如きゑづけき朝かな

花賣のいでたるあとの白川の道秋冷ゆる朝
のさびしさ

こゝに來て君を生みたる山城の天地見れば
なつかしきかな（以下、竹内栖鳳氏を訪ひて）

秋高き二條の城のまぢかなる二階に君とあ
ぐる杯

話なかばオルガン鳴りて窓外の高き芙蓉に
秋かぜの見ゆ

夕さりて窓かけ引けば眼に入れる百日紅の
白き花かな

※

西の京の秋をながるゝ川々の瀬の音をおもひ
君をおもひぬ

初夏の葵まつりのころに來むとばかりいひて別れ來にけり

わがかへる夜汽車の窓におくり來し人をさびしみわかれかねつも

ましろくも涙の色のてる頬を夜あけの汽車にさめておもひぬ

今日の雨に紅殻いろの塗の戸の内玄めやかに君こもるらむ

かへり來て二日三日はまつはれる旅のこゝろのなつかしきかな

汽車著ける夕日の中の關が原かの山々の秋をかなしむ

加茂川のやなぎのかげの氷店ミルクセーキ
をよく飲みしかな

※

からだぢう熱に浸りてわがあたり渾沌とし
て暮るゝさびしさ

硝子窓にうつる木の葉の黄なる色わがおと
ろへの眼とあへるかな

西の國の梨を描けるおくりもの熱き額にふ
れまくおもふ

病みふしてつくづくおもふ病みふせる間は
せめてほだしのがれむ

そことなく木犀の香ぞかをりくるわれ病み
てより幾日へぬらむ

雨つゞき障子の紙の変めれるをこゝろ貧し
く見つゝ病みふす

病牀に匍ひ來りたる青き翅の小さき蟲をあ
はれみにける

のみさしの洋杯の乳に秋の朝の障子をもる
る日の映ろへる

今日は病やゝこゝろよし曾て見し青き山河
眼にうかびくる

病みあがり町に出づれば秋風の白く砂あげ
わが瘠せを吹く

秋風吹く庭の落葉を音させてあそべる鳥の
數の加はる

藤棚の下に山羊飼ふ獨身の人のやつれの去
るき秋かな

風の日の黄なる夕陽の落ちゆける原のあな
たになだるゝ芒

夕風は芙蓉にそよぎくれゆけりありし心も
見うしなひぬる

海遠く空澄みわたる新秋を埠頭に立ちて望
み見るかな

わがにふゐ潤ほす如く初秋の雨そゝぎ來て
霧るゝ夕ぞら

秋來るこのおとづれのおごそかに口を噤み
て空を見るかな

いくぢなくわが神經のよわり來て秋風の前に涙といまらず

鹿の音をきかばや山の秋霧に旅のころもをそぼぬらさばや

※

島廳の白壁のいろあかるくも大海の青と相うつる秋

船造る工場より來る斧の音の海にひゞきて高き秋かな

こゝろよく船をあやつる漁人等の生活を見る秋晴の海

細き腰二幅におほひ秋でりのあつき島曲をとめごの行く

秋かせに島の司の娘といふがかぐろき髪を
なびかせてをり

篝焚き銅鑼がねをうつ島人の祭の夜の去ら
むさびしさ

芭蕉ふく初秋かせに童謡のこゝかしこより
起る夕ぐれ

旅籠屋のはなれを洩るゝ火を尋めて熊笹鳴
らし來るは誰が子ぞ

戸の隙よりもるゝ女の黒き瞳のものいふ如
き夜のけはひかな

昨夜のこと婢に問へばうち笑ふくづるゝ如
くうち笑ふのみ

落葉するころともならば武藏野の天地いか
に哀しかるらむ（以下、菱田春草氏を悼みて）

あたらしき果を割けば君が繪のにほひふと
して來るさびしさ

新しきわが國の繪の進むべき路を照して逝
きし君はも

かりそめに木傳ふ鳥の生活もこまかに君は
見給ひしかな

秋かぜに君なしといふその事の大いなる繪
にわたる哀しみ

※

多摩川の川原に立ちて暮れぎはの遠く明る
き山脈を見る

ましろなる多摩川石をてりかへす秋の日寒
く水に沈みぬ

路一すぢ川に出づればをちこちの疎林の色
の薄紅葉せる

藍色の水をはさめる秋の日のひろき川原に
そよげる芒

路たえて芒わくればほそぼそと多摩の岐れ
の水澄みて行く

草山にのぼれば秋の一すぢの多摩のながれ
の白きをちかた

草山の赤松が梢に鳥啼けり木の根にひとり
われの憩へる

こすもすのそよぐ茶店の土手下の川原にあ
そぶ二羽の鶏

水邊の寺より撞ける鐘の音の芒の中に消ゆ
るさびしさ

多摩川に流す燈籠黄や赤や白きみぎはの石
にうつれる

假橋のゆらりゆらりと薄宵の水にうかべる
燈籠を見る

鳴ゐる鳥羽の浦曲の秋の日の砂地の舟に君
の倚るらむ（旅なる栖鳳氏に）

君のせて敦賀に向ふ舟ならむ晴れたる海に
煙ながるゝ

秋來ればとつぎゆくてふなまめける人の假寢を次の間に見る

次の間をかへりみつゝもその母は子の去どけなさ殊更にいふ

えりあしの白きに蠅のとまりゐぬつくづく見ればうら若きかな

嫁ぐ前の女の胸のやすからぬうつくしさなどそゞろにおもふ

庭前のそよぐ萩にもおどろきて胸乳のうごき透けるうすもの

柔らかく線のまるみのとゝのひし女の皮膚の白きかなしみ

うすぬるく曇り日させる花臺のさふらんに
ねる蜂を見まもる

*

うらがなし鈍き汽笛のうちひゞき雨そぼふ
るに東京を出づ（以下、常陸なる五浦に旅して）

こゝろうくかへりみらるゝ東京の空雲もな
く晴れわたるかな

五浦の五つの入江あゐいろの波おだやかに
松のかげする

隣國の小名の間の海上に雨雲おこり雷鳴り
わたる

紺青の遠き岬のうすぐもり重き海氣を動か
せる風

大漁の鰹の腹も背も光る月夜の濱の人のど
よめき

海邊の廓をぞめく若衆の浴衣すがたのをか
しき月夜

なりはひの蜑の兒がする物眞似に釣すれば
章魚のかゝり來にけり

潮風に吹かるゝ山の石楠花の花そこ〻となく
匂ふ夕ぐれ

夕くれて繪卷の中に見るごとき一もと杉に
海の光れる

夏つばき涼しき花のうちそよぎ小松の中に
くるゝ磯かな

砂白き五浦の濱にちらばれる貝の化石の光
る夕月

蒼茫とくれゆく水の音もなく海より來る風
の涼しき

わが吸へる煙草の火のみ光りけり月夜の海
の遠白きかな

海の風、夜ふけの磯の砂をまく騷がしき時目
ざめてありぬ

海白き夜の砂路にわがかげのあやしきまで
に靜かなるかな

白ゆかた宿の娘の玄なやかの手につがれた
るサイダーの色

サイダーの白き泡ふく窓ぎはに涼しき風の
海より來る

蓄音機しづかに歌ひやみにけり雨夜の磯の
ふくる宿かな

窓際のほのかに白く磯の夜の月あかりして
海凪ぎにけり

松青く夜は明けゆける窓外の山と海との氣
を吸へるかな

松の根よりうねりうねりて匍ひいでし蛇の
背青く砂に光れり

すがれたる濱茄子の花の香もさびし水無月
の日の照りそゝぐかな

松山のしづく去たゝり舟の帆のぬれたる色
に日の光りけり

雨すぎて遠き岬の日にけぶる紺青色のうる
はしきかな

水無月のつよき日にてる常夏の濱邊の砂に
紅きかげする

砂みちの松の根方にとぐろ卷く蛇のうろこ
の綠青の色

魚の如く漁師の妻のよこたはる涼みゝ臺の
あさき宵かな

さすらひて東下りの業平のこゝろの如くさ
びしくも來ぬ

むらだてる松うごかして海の風鳴れる勿來
のさびしき夏かな

＊

音もなく春はくれゆく後方より新樹のみど
りうちそよぎつゝ

口つくれば酒のにほひも苦からず暮春はも
のゝなつかしきかな

あたふたと樹陰の椅子に身を投ぐることあ
り春の暮れゆくこのごろ

塀外の赤土にさく白つゝじ薄きかげある午
後の日の色

夕されば青くいきする燈臺の灯かげに海の
しづかなるかな

海邊の石がけの上の青草に晴れたる夏の日の光りかな

靜かなる心の中にいさゝかの動搖もあり五月のこのごろ

鑵詰のミルクの腐るにほひなど厨よりする五月の夜の雨

青みわたる垣のあなたの隣り家の楓の奥にさく花のあり

土ならし花畑つくる少年の白き額に汗する初夏

青き風青桐を吹く初夏の朝の机の輕き手ざはり

病む鶏の皺枯れごゑに啼く眞ひる、氣になり
てまた緣に出て見る

わかしてふ倚りどころなき生命のくづされ
ゆくがごとき暮春

久々に無聊を感じ本箱の蓋とればする樟腦
のかをり

木斛の芽ざしあかるく初夏の光みなぎる青
の大空

わが若さ傷つけられじとばかりに自ら守り
來にしさびしさ

ぽうと鳴る汽船の笛の耳に入る港のひるの
わがねざめかな

うつとりと旅館の畳の二階より煙あげゆく
船をながめぬ

二階より汽船の往來見てあれば夕さり來り
蜩の啼く

日の光り青葉を透きてちらばれる兎の仰の
白き畳かな

水無月の芭蕉葉の上の日光を時にうごかす
風のおとづれ

*

顔よせて吸入をする病人の湯氣に去とれる
亂れたる髪

うつとりと疲れし眼をふたぎゐる病める妹
を見れば悲しき

手の痛せのいちじるしくも見えて來ぬ白き
寢床のうすらつめたし

日に光る背桐の芽を眺めつゝ病むとしもなき黑き瞳の色

※

山の手の暗き厨に水がめを搔き出す音のさびしき夕

黃の埃つもれる河岸の物揚げ場春のやなぎの青々と伸ぶ

水赭く鐵氣ながるゝ裏川に春の入日を立ちつくし見る

くづれたる崖の間をうちつゞる青く小さき蕗の葉のむれ

松枯れて蔦のわか葉に微風ある春くれ方の
さびしき門かな

人を見ておどろく猫のふりかへるとある垣
根の春の夕ぐれ

高き樹の風のあつまり吹きつくる小さき家
の山ざくら花

寺の門入れば一すぢ見えわたる御墓の木々
に春鳥の啼く

木瓜の花その温色のたゞよへる墓くまなく
も春の日を浴ぶ

ほだしよりのがれて春のくれつ方こゝろ玄
づかに郊外をゆく

移り來しをぐらき家の裏庭に蒲公英の黄の
あつまれるかな

*

病牀に力うすくもながめ入る室のすべてに
夕ぐれは來ぬ

一日の事のおくれもたまさかの病ゆるぞと
やすく寢ねける

こゝろよく眠りしあとに襲ひくる覺めし悲
哀の堪へがたきかな

幻のゆめよりさめて人々のおぼろの顔の眼
にのこりけり

草木の濃き青き野の日の色の次第に褪めて
幻覺に入りぬ

夢の中に見し雪降りのうす暗くすさまじか
りし夜なりしかな

夕ぐれの暗き木立にひとすぢの線投げてつ
と鳥のかけ入る

霜ばしらかひなく朝の日にくづれむらむら
あがる水蒸氣かな

土あげて蕗の薹もゆ切株におなじ青さの芽
をふけるころ

山中のいでゆにひたり春の日の流るゝ戸外
の鳥をきくらむ

海道の月明らかに波白き千本濱の松ばやし
かな

海荒るゝ夜ぞと松間の低き家に病める妹の
夢を氣づかふ

濤の如き夜更けの風の音に聽く松の林のさ
わがしさなど

＊

わが前をゆく穏やかの足取りのある音樂の
如くひゞける

そこ
ふく
このゆ
より
煙草
しそ

そこ
ふく
このゆ
より
煙草
しそ

そことなく水氣だちたる春の夜のおぼろに
ふくる街の色かな

このゆふべいつも見あぐる四つ角の時計臺
より春の月出づ

煙草の火深夜の路のさびしさを微かにてら
しそひてゆくかな

西方にオレンジ色の雲いでゝ夕ぐれ春の雪はれにけり

春の夜の電車の音の遠ざかりあるかなきかもなまめかしけれ

潤へる月のもとなる春の夜の心かなしく君に往きける

夜歩きのいつしか春を思はする土やはらかき一すぢの路

立ちどまり額の汗をふと拭ふうらゝかの日の時計屋の前

春寒く蕗の若葉のもゆるころ君を思へばわがこゝろ足る

京の山、草青々と萠えいづる春の光りのなか
に君見む

さくら咲くころともならば君訪はむ君を生
みたる美はしき京

つらなれる支那の山河君が繪に大なるもの
のほしいまゝなり（横山大觀氏へ）

乾きたる空氣の中に呼吸をする植物の葉の
うす白けたり

木斛のみどりに白き埃見ゆ風しづまりし午
後の日向に

並木路のはて茫として落ちゆきし夕陽の色
の赤くのこれる

このゆふべ土手にのぼればうちつゞく商家の屋根の寒く明るし

路ばたに鷄鳴をきゝひるころの春の感じの中を行くかな

頰を打つ沙の風の白き夜破れ船を焚く男ありけり

大木の根方にいでし青き芽のなよなよとして風に揉まるゝ

おぼろなる君が背後の描きかけの繪絹の枠の春の夕ぐれ

さゝやかに舌打ちすれば春寒き梢をはなれ鳥の飛びくる

蘭の花におなじ色なる猫の來ぬこのいさゝ
かの事の目につく

透きとほる空氣の中によく見ゆる枯草原を
はしるけだもの

路の塵いづるあたりの荒れ土のほのかに春
の氣をあげにけり

春の雪乘合馬車の過ぎゆきしわだちのあと
のおさくつゞける

目の下の遠きちまたの人々の動作(どうさ)の見ゆる
明るき夕ぐれ

褪(さ)めてゆく夕日の名殘りいと寒き常磐木の
葉の重くそよげる

一月の雷鳴をきゝさかづきをおきたる友の
蒼白き顔

夜の如くとざせる戸よりいなづまの酒の肴
の上を走れる

氷雨する夜のちまたをかへり來る酒にさめ
たる一人の男

かへりくればとざせる門の戸のおもくあく
る響のうちゑめりぬる

さめぎはの酒のおくびの不快なるこゝろを
永く忘れざるべし

初雷の二日酔してさめやらぬ頭の底にうち
ひゞきけり

東京の街をいろどる色彩を眞白くかぎり日
夜雪ふる

雪白きかの三階のあなたより剝がるゝやう
に青空となる

一瞥をわれに與へて過ぎ去りし馬上の人を
見おくる雪夜

ばさばさと雪に追はれて落ち來る青羽の鳥
の頸に血流る

柘榴の實葉なき梢にゆられつゝ風の夕にあ
はれ殘れり

かへり咲く李の花のいやはての一木よりす
る初冬の匂ひ

風ふけば夕日の薄き黄なる葉の重なりあひてさやぐ淋しさ

眼を閉ぢてまた開き見ぬ冬がれの庭にはつひに一草もなし

踏みしむる我が爪先きの感じなき路上の霜の深き朝かな

逢ふほどの人みな青く粟立てる貧しき相に冬がなしつる

冬の日の眠るが如き陰もとめ去ばしはそこに憩はむとする

妻をつれ子をつれ歳暮の午後をゆく小役人等の多き街かな

めづらしく縁の日向に足のべて正月ちかき
こともおもひぬ

かくながら明日につゞかむ青く澄む大晦日
の夕ぐれの空

ゆるやかに煙草を吹きて淡々と今宵に澄き
る年をおくれる

あたらしき白前垂の髪結ひがうかぬ顔して
往來をゆく

松とれて俄かに街のさびしさをおぼゆる日
より病をえたる

黄なる花わが生活のさびしさにうすら匂へ
る福壽草かな

冬の日のものに飢ゑたる眼をとめて萬年青
の赤き實を去ばし見る

赤き實の萬年青のそばの殘雪のこほれるま
まに春に入るかな

今朝の寒さまぎらさむとし一本の煙草のけ
むり吹きながら行く

朽ちし葉のちりしきる夕に電燈の座敷に放
つ白き光よ

露店の少なくなれる夜の町にほしくもあら
ぬものを買ひぬる

路ひろく坦々として電車行く街のながめの
ものさびしけれ

かへり來て門前の燈の消えたるに空屋の如
き寒けさのする

齒の痛み頭の痛みうちまじり日は暮れ長き
夜は來りぬ

手をとりて長き旅より歸り來しさびしき友
をねぎらふ冬の日

冬の木の箒をなしてつらなれる枯原に日の
うちけぶりけり

山茶花の寒きはだへと啼く鳥の透きとほる
音に初冬を知る

霜よりも白き寒けき花の色の庭の日向にに
ほふ山茶花

川ばたを行ける荷馬の濃き息の青くこほれる朝空に消ゆ

ゆるやかに生れたる日はめぐり來ぬわが眼の前の常磐木の花

霜月の日向にたまる落葉の乾きたる香のあたゝかに來る

冬ざれの荒れたる松の樹の皮を掻きゆく猫の爪のはしれる

黄の落ちし木立に寒く鳥ぞ啼く初冬となる夕ぐれのころ

樫の葉の青々として眼に沁みる冬のはじめの霜見ゆる森

冬のけはひ去るくも見ゆる裸木の白き霜こそあはれなりけれ

あたゝかき河原にあそぶ鳥の群れ一つ一つにおもむきを見る

かへりきて街の埃の目を去らず室の燈火のなほおぼろなり

裸木の百日紅に鴉あり冬のゆふべをこわだかに啼く

荒涼に目なれし庭の片すみに小菊の花を見いでしあはれさ

丘などの黄葉林に出で入れる鳥のつばさに夕日するころ

黄なる葉に夜風わたればさやぎあひ一片ごとの動ける光り

一帯の黄葉する木をうしろにし小さき家のつらなれるかな

山の手の緑日の夜のうすあかく油煙の色のたゞよへる空

坂下の小さき町の緑日の夜の露店の人だかりかな

郊外の低き工場の煙突のけむり一すぢあぐる夕ぐれ

湯をいでゝ遠き巷のこゑをきく疲れし夜のうら安さかな

霜白き林の上の夜の空のなほあけやらぬさ
びしみの見ゆ

忽ちに風の如くもつどひ來し小鳥に黑く染
まる冬の樹

雪空のやゝに黃ばみて日の見ゆる夕ぐれ部
屋の障子開きぬ

枇杷の葉はかさりと落ちぬ初冬の音なく色
なく匂ひなき夕

夕されば落葉くづして庭中にちらけし風の
音絕えにけり

なやましき額にせまる常磐木の梢に花の見
ゆる朝かな

赤き實と青黑き葉とうちけぶり枯木の霜の
溶くる間に

冬來るゆふべはさびし散りしける落葉にふ
るゝ落葉の音する

じつとあれば頭くさるにえも堪へず街のど
よみに身を投げ入れぬ

池ふりて青くにごれる水底の金魚の群れの
うすく赤く見ゆ

椿の葉暗き綠のさびしさのきはまる如き夕
べなるかな

朝の月あれたる土の霜白き五町が程を淡く
照せり

このごろの稀れの日和に庭中の草紅葉など
わが眺めつゝ

公園に霜よけをする植木屋の煙草のけむり
ゆるやかにゆく

門入れば人なきごとく静かなる白き障子の
中に日の射す

蔓花につめたく浸り昆虫のあはれに羽の衰
へにけり

誰が家か焼けし、いぬゐの夜の空にあかく残
れる火の寒く見ゆ

初冬の空のあなたの朝雲の凍れる如き透け
る色かな

四つ角の枯木に霜のきゆるころ鋭く月の光
さしける

冬の木のまばらに立てる山間の夕ぐれごろ
の寵のけむり

どんよりと雪降る前の夕ぞらに翼を垂れて
烏の翔れる

山茶花の梢の花に吸へる日の去きりにけぶ
る冬の日の朝

君去りて俄かに冬の來し如くこゝろ寒けき
風のひゞける

藍色のしづめる空のはて低う冬ちかき日の
夕ぐれのころ

午後の日のうすき築地の川ばたに海より來る白鳥の飛ぶ

水ばたの沙をあぐる冬ざれの風にまじりて鳥の飛びかふ

蔓草の乾びたる實に霜おける林の中の小暗き木の根

初冬のしづかなる日に枇杷の花白くちりくる二階の窓かな

枇杷の花咲けばさびしき香をもとめあつまり來る小鳥の聲々

木斛の實の裂けたるにさし入れる十一月の乾ける日かげ

そのむかし祖母が好みし懸時計わが揺かせば鳴りいでにけり

ふるきこの時計に時を見ることを祖母はわれに教へたまひし

セコンドのゆるき刻みに何とやら昔の人のころのするかな

ボンボンと暗き家内に鳴りわたる古き時計の音のあはれさ

＊

東京の秋のをはりの日没どろやなぎの陰の濠端を行く

大木の根方にのこる白き日の淡くきえゆく秋の夕ぐれ

蔓草の病めるが如き疲れたるこゝろをもと
め木の間にぞ入る

脚病みて俥をかれるゆきかひの路上に秋の
果を見にけり

長き夜のねむりにふれしものゝ果の白きに
ほひにまた夢をえぬ

閉場ちかき劇場裏の夜の路しづけきものゝ
亂れむとする

雨の日のしめりに青き果物のそことも知ら
ず匂ひ來れり

無花果を摘みたるあとの雨つゞき秋は俄か
に寒くなりけり

さびしさに出づれば秋の野は廣く黄葉する
木のちらばれるかな

ほがらかに鳥は歌へり高き樹の梢おほかた
黄葉しにける

木斛の實となるころの秋早りの痛かりし齒
をおもはするかな

山々に黄いろく木の葉染まりけりわが默す
日のうちつゞくらむ

黄葉する信濃の國の高原に行きにし友よさ
びしかるべし

小諸より秋のおもひに堪へぬてふたよりに
友のおもかげを戀ふ

秋はやき山邊はすでに黄葉して十月末の霜
さむからむ

月の夜の山の黄葉のしづくする樹かげの冷
えに身をやぶらざれ

秋の日のおもひはてなし火を噴ける山の煙
も見渡しにけり

草の實のあまたつらなり秋空を指すくれな
ゐのうすらにじめる

晩秋の黄なる夕日のうすれたる名殘りの空
に雲のうかべり

秋の日の山の煙の立ちのぼる遠きあなたの
一ひらの雲

乾きたる空氣ゑめらし晩秋のゆふべの土に

枇杷の花ちる

黄なる葉に夕冷え冷えと迫りきぬ林の中の

きはまれる路

白々とはてなきものゝ明らかに秋の夕べの

大河は行く

夕つゆの蔓草などにむらがれる林の奥の大

木のもと

月光は杳かに路をてらしけりひとり愁ひて

いづくにか行く

樹がくれの暗よりいでゝ時に見るめざむる

ごとき月の夜の原

仰ぎ見れば月天にあり家いでゝ遠きに來れ
どさびしからぬかな

白くして遮やるものなき一すぢの月夜の路
の遠くこそあれ

無花果の熟れ裂けたるに月かげの青く沁み
入る夜の色かな

青黑く路に垂れたる柳の葉音なくかなしく
秋はいぬめり

雨水のさびしく玄みて庭土の秋草の根をう
るほしにける

秋かぜに月見草さく、一輪の黃のかなしみの
くらくなりゆく

手にするに動きもやらぬ大いなる金魚の死に
のあはれなりける

背をならべ雨に打たれゐるくれなゐの金魚
の群の尻尾のうごく

待ちしこと皆過ぎ去りて秋まさに暮れなむ
とする寂しき日かげ

秋かぜに天地長くひらけたりわが一人のか
げのさびしさ

初秋の薄暮の街の白けたる一すぢ路をかへ
りゆくかな

病ありいねてある間を雨つゞき城の東は水
にひたりぬ

大水のおそひ來れる音遠くまくらもたげて
きく夜つゞけり

友のすむ門の松さへ浸りぬと話の如きおと
づれの來る

瓦斯の燈のともらぬ夜の街の色にごれり水
のあとのさびしさ

水の上にたゞよふ町のともしびの永くかな
しく眼にのこるらむ

水ひきし河原の砂に貝殼のうすき日を受け
白く光れる

水ひきしあとのされたる路ふみて浸りし家
に君かへるらむ

水あとの畳の上を船むしの這へるあたりに
日のちらばれり

君がとる酒杯に這へるこほろぎに水あとの
夜の月蒼くさす

断えてまたつゞく雨中の蝉の音をこゝろ寂
しくきく夕かな

蝉の音は森のあなたに遠ざかり強き夕べの
雨に消えにけり

秋風は白き葉うらの道草をひるがへしつゝ
遠きにいたる

月淡くいつしか秋をもたらせり空あふぎつ
つ川端をゆく

黄に染みて葉摺れことなる朝風に秋かなし
くも見えそめにけれ

初秋に死なむといひて死にませし祖母が忌
の九月は來にけり

蘭の花萩の花などみな君がこのみし花に秋
風のふく

祖母君のおもわの色の透きとほる白さをお
もふ秋の朝かな

秋來る窓を越したる雑草の黄ばめる花に露
のうかべる

芙蓉の花そのあかるみの寂しさに心をよせ
て去ばしたゝずむ

「維盛」の劇見てかへる水ばたの夜の鐘の音の
あはれなりける

秋風に赤く裂けたる無花果の雨のたまりに
うつるさびしさ

霧はれて明るくなれる原の木の葉の重なり
のひまあらく見ゆ

大銀杏ひと葉動かず秋雲の晴れたる下に黄
なる玄づけさ

興もなくわが走らすペン尖きに夕べの色
のにじみより來ぬ

書きやめてもの疲れ見る紙の面に殘れる白
の哀しき色かな

平凡の歌よむ人の庭に咲く淡彩色のくさぐさの花（以下、或る時のノートに）

自らを嗤へる歌もよみえざるこゝろ臆せる歌人なりけり

鳥のこゑ木の葉のそよぎ歌人のこゝろわけなくものに親しむ

刺戟なく住めるみやこの片ほとり空の高きに秋を知るてふ

牛込の見附のやなぎ雨ふるに似たるえづれもよしと歌へり

無花果の葉陰にすゑし椅子にゆき汗ふきておもふ朝よりのこと

とゞこほる心平野をゆく水の流れを遠く眺
めぬるかな

疲れたる足引きずりて來し川原、月見草さき
風のそよげり

木陰なれば秋海棠のつゆの干ぬ八月はじめ
の畫のしづけさ

かりそめの事なしはてしのみなるにさびし
く心足らへる夕

朝風はまづおもむけり唐あやめむらがり咲
けるそのひと莖に

昂ぶりしかんなの紅もいちやうに月夜の庭
の花の玄とれる

しづまりて一葉うごかぬ夜の如き木深き庭
のあけくれをめづ

槇の木の並み立つ庭の夕ぐれの去げみに來
りひぐらしの啼く

風ふけば水引ぐさのうちそよぐ垣根をもる
る灯のながれかな

一籠の風うごかざる夕ぐれに眠れる如き家
のむなしさ

かゞやける藍色の空にそびえたつ一もとの
樹に日のあつまれり

水草のむらさきの花よくそよぐ淡き川邊の
夏の夕ぐれ

燈を消して寢ねむとすれば雨白く更けし外

面に走り來れり

こすもすの素直に青くのびゆける庭地ぬら

して雨來る朝

たまりたる水に青葉のうすぐらく消えがた

きものゝあはれをおもふ

移り來て旅中の如きさびしみのはかなく胸

を去りやらぬかな

雨の日のさみしき胸にうちひゞき枇杷の古

葉の落ちかさなれる

枇杷の果のあかるみゆくを眺めつゝ雨霽れ

し朝の風に吹かれぬ

夕かげの去げくなりゆく庭の面に猫の白き
がふと浮び出づ

引越の車の上にはみ出せる洋書の徽の白き
さびしさ

やすからぬ旅より旅にゆく如く梅雨の中に
家をたづぬる

黄に熟みて落ちたる枇杷の數知れず人目か
れにし庭のさびしさ

しばらくは自ら卑く草深うとざせる君が戸
をたゝきける

草山にむらがり咲ける待宵のあかるき色を
見にゆく夕

こゝろよく蔓のたぐひのまつはれる垣そぼ
ぬらし夏の雨ふる

杜に行けば月見草さく、夕ぐれの乏しきこゝ
ろ満すばかりに

初夏の風のながれを倚りて見ぬ原のまなか
の大木のかげ

曇る日のわか葉の色を動かして雨こまかく
も降りいでしかな

玄たしみて來れる青き河のほとり、あかるく
風の水わたりゆく

蜂は巣をつくると永き日も倦まず、わか葉や
うやく濃きかげをなす

こゝろなく眺むるほどに蜂はその巣のいと
なみに脊せほそるらし

朝の霧おもくかゝりて楙などの梢のわか葉
雨あるごとし

こゝろよく初夏の野を風わたる、おぼえずわ
れは走らむとせり

いと淡きつゝじの花の色彩は青草の野にと
とのひにけり

大木のわか葉の玄げりつと亂れ四五羽の鳥
の目に動きける

こゝろ今わかしとわれをはげましぬ新樹の
色にみちびかれつゝ

暗くくらく心次第にかたむきて消えなむと
する日の光りかな

青草は初夏の日にうるほひて野はなめらか
にはてしなきかな

初夏のみどりのはてをめぐり來しつかれし
風の額にふれけり

一椀のうすみどりなる茶の色の新たに胸を
うるほせるかな

晴れやかにわか葉しげりて日の光りみちわ
たりたる野に眼を放つ

音もなくいたれる雨の玄づけさのわが哀し
みにひゞきぬるかな

*

ほそぼそと夜の蛙の啼きつゞく四年住みに
し大久保を去る

かゞやかに迫る新樹を見かへりて戸山が原
に遠ざかりゆく

移り來て庭をおほへる枇杷の葉にをぐらき
室を哀しくも見ぬ

うすぐもる日のみつゞける晩春のさびしき
庭に金雀枝を植う

花落ちてけぶれる如きものゝ果の青黒き枇
杷の葉がくれに見ゆ

石蕗の葉に朝の雨聽き村住みの昨日のこゝ
ろ遠くともなし

鈍ましくなりし心のあはれにも市のどよみ
をよそにのみ聽く

快々と來りし野べのわか葉かげ、慰められて
しばし憩へる

玄めやかにうるほへる朝の風うけて榛のわ
か葉の輕くそよげる

かゞやきて若葉の色の眼を射ればこゝろ弱
くも額に手をあつ

つゝじの花、黄に色褪せて新緑のうすくらが
りに眠れる如し

原中の四年の歌の詠みどころ橡の大木は青
葉しぬらむ

わかれかね戸山が原の新緑に小鳥の如く栖(す)
を去たひ來ぬ

朝風にこゝろ輕くも追はれ來ぬ、かの原中の
みどり葉の見ゆ

かなしき日さびしき日のみうちつゞく梅雨
の空の風の重たき

朝見れば凉しき夜(よる)に花咲きしふらねる草(さう)の
うちそよぎけり

さびしくも杜若(かきつばた)など植ゑて見ぬ、はづかに雨
のはれし夕ぐれ

青々と梢しげりて庭の木のあかるき中に蜂
のうなれる

思ひみだれ常のこゝろのあらぬ日も夕されば家に歸り來りぬ

あはれなる旅商人の群に入りゆくへも知らず人はなりにき

日に光る青葉の中に迷ひゆきさびしき我をかへりみるかな

青々とわか草伸ぶる野にいでゝ夏ちかき日の風を見にけり

あはれこの春くるゝ夜のふけゆくにさみしく犬の遠方に吠ゆ

春くるゝ夜のはかなさのかすかなるひゞきとなりて胸にかよへり

夜となれば雨あたゝかくそゝぎ來てこのごろ夢のすくなかりけり

ゆく水のあかるき岸にさくら草九輪草など

こゝろよく崩ゆ

春の湯の宿のしづけさ輕くゆり爪切る音の隣室にする

椿ちるそのくだけちる花びらのさみしく夢をさまさむとせり

春の夜のそゞろありきの安けさに遠くも家を離れ來にけり

何ごともおもはず土手の草ふみて夕ぐれ淡き町の灯を見る

うらやすきねむりよりさめ出でゝ見る青木
が原に霧のふるなり

春の夜の惡酒の醉のさめがたくねもせで白
き朝をむかへぬ

花いまだ咲かざる木々のやすらけき夜の下
かげにさまよひて來ぬ

のどかなる春に逢へれど、みづからの心やし
なふ日もなかりけり

風いでゝ高く林の鳴る音をわりなく春の悲
にきくかな

夕日すでに草にかげりて春の野の林の遠に
霧ののぼりぬ

芝原は青みわたりて春の日の光しづかにた
だよへるかな

野の木々は白くけぶりてわが行ける一路ほ
のかに月の照せり

わか草をわたれる風の新しきひゞき輕くも
耳にきたりぬ

日の光やはく沁みくる眼のうちにをぐらき
影のふれて去にけり

雨多きかの海國のたそがれの磯草の香を戀
ひわたるかな

ものなべてよき意味にのみ解しぬる人の心
をさびしみにけり

見ゆる彼のあかるき方をおもひつゝ心むな
しく行き迷ひけれ

新しきこゝろの匂ひ嗅ぐ如きこの路ばたの
ひと莖の草

遠き樹の梢けぶりて野の人の鍬上げおろす
のみの動ける

馬しきりに野のわか草を食みてあり春の光
りののどかなるかな

あかつきをおぼえぬ春の眠りよりもの愕き
にさめむとぞおもふ

沈丁花雨しめやかにいたる夜の重き空氣の
なかに匂へり

人遠くまたしみ來る如くにもこの夕ぐれの
靄のひゞける

朝ごとの椿の青に目ざめぬるならひの前に
花の見えくる

春の日は椿のかげにかくれたり、ものはかな
くもなれる夕かな

白壁にむかひてあればわが胸に不安の影の
ひろごりにけり

えり寒うさむれば頭なやましくわびしき夜
半の風の音かな

春かぜは街をわたりぬ人々の歩むうしろに
塵のあがれり

公園のベンチによりて春の日の疲れし色に
落ちゆくを見ぬ

うごめけるいきものゝ眼に映りたるものゝ
象をうたがひてみぬ

いきものゝなべての顔のわが前にうかび來
りて眼のいとまなし

あふごとに哀しき夢をくりかへす君にこゝ
ろの弱くなりけり

雪路のこほれる上をふきわたる夜風の中に
月落ちにけり

わか草の上うづたかく雪ふりて莽やはらか
うとざゝれにけれ

雪あだかも晝より霽れてさりげなき彌生の
空のあたゝかきかな

あめつちに崩せる春の氣を冷しひねもす雪
のしげく降るかな

春の夜の風にうごきてくらき室の柱の鏡白
く光れり

馬遠くいなゝくこゑののどかなる野は平ら
かにわか草の萠ゆ

こゑ遠く鳥のうたへるあたりなり梢に白く
花の見ゆるは

椿の葉月をうかべて去づかなる森の夕べの
夜となりにけり

夜の色の玄づかに來るさみしさをこのかへ
るさの路におぼえぬ

みづ枝ちす青木に見ゆるくれなゐの實の聚
まりの強く眼を射る

相見れば世のつね人に過ぎざりき花の白き
をあはれとぞいふ

さびしくもひとり別れてかへり來ぬ草の裏
葉のうらがへる路

この川の葉ざくら陰の夕ぐれに流れを趁ひ
て涼しく來にけり

＊

病める兒のうつとりとせるわが前の電車の
中の秋の日ざしよ

その顔のいだける母にいきうつし同じ口し
てもの言へるかな

兒らしきふくらみもなき頰の肉の大人の如
く見えていぢらし

母の手にいつか寢入りぬ俯向きに垂れたる
頸の細きあはれさ

發育のわろきかぼその兒が手足撫でつゝ寢
がほ見まもれる母

つと入り來て釣革をもつ母娘づれ、前の病兒
を見むともせざり

去ばしの間も芝居ばなしをつゞけゐし母娘
は立ちしまゝに降りゆく

終點に近づく時にふと見れば病兒も母もね
むりにぞ落つ

あはれこの電車の中を家とするさびしき人
のいぎたなきさま

晩秋の川のやなぎの黄なる葉のみだるゝ方
に誘はれてゆく

いつまでも病兒の顔の目の前の枯草路にち
らつけるかな

枯草の中より鳥の飛び立ちぬ、かなたに見ゆ
る水の一すぢ

こゝまでは電車のひゞき聞え來ず、ぢと ぢと
風の草原を吹く

十月の曇る空より日光射し果あかるき樹木の見ゆれ

※

新建ちの親の家をばたづねゆく巣鴨の里の薄もみぢごろ

黄葉せし林の中のあたゝかさ小さき弟の出てあそぶかな

しばし見ぬ妹の大きくなりしこと小鳥の如くよく喋べること

二階よりもみぢ林の夕づく日きえゆくまでのさびしさを見る

しみじみと司馬江漢の南瓜の絵さびたる秋の日のにじみける

つらなれる黄なる木の葉の風ふけばひらひ
らと眼にこゝろよくちる

枯草の見よげに黄なる色に染むそのさびし
さのつゝましきかな

晩秋の晴れわたる空のかなしけれ、ひろびろ
とわがさす目路もなし

一面に冬の日をうけきづかなる林の中に時
たま鳥なく

風遠く來り林の鳴る夜なり一人一人おもふ
寂しき人々

秋のにほひわが心去りダーリヤの花のすが
れの眼にうとうとし

林よりつと白き犬走りいで秋のこゝろは脅
やかされぬ

品川の臺場の草生黄に枯れて鴎のあそぶ十
二月かな

その母はわが歌を愛で讀みしてふ子が啼く
こゑのわれにかも似る

子供なりし時のわが如ひとりゐる路ばたの
兒の頭をば撫づ

ませし口きく子の前の親の顔たるみながら
にうち笑ふかな

話しかくる女の兒こそうるさけれくみし易
しと我を見つらむ

料理屋に喰ひちらす兒をそばに見て兒と云

ふものゝつくづく厭はし

七五三の今日の祝日ものもしき著かざれる

兒の街に滿つかな

いつよりか兒をうるさくも思ひけむ、あさま

しく心荒みゐるらし

ことさらにつくり笑ひし同情を求むる風の

兒に怖れける

赤とんぼの如くつながり垣に沿ひ唱歌をう

たひゆける兒等かな

——をはり——

著者歌集目錄

◎片われ月　明治三十四年一月
◎小詩國　明治三十八年三月
◎伶人　明治三十九年四月
◎わがおもひ　明治四十年三月
◎覺めたる歌　明治四十三年三月
◎山河　明治四十四年十二月

明治四十四年十二月廿六日印刷
明治四十四年十二月三十日發行　（定價四拾錢）

著作者　金子薰園
發行者　佐藤義亮　麹町區飯田町三丁目二十五番地
印刷者　山田英二　小石川區久堅町百〇八番地

發行所　新潮社　東京市麹町區飯田町三丁目二十五番地
電話（番町）二二、二三番　振替（東京）一七、四二番

不許複製

金子薫園著

◉和歌新辭典　第四版

▼總洋布製——定價六拾錢、郵稅六錢

◉和歌入門　第九版

▼總洋布製——定價四拾錢、郵稅四錢

新潮社藏版

266
807